

ネリヤカナヤ創世記

奄美市立朝日小学校 六年 永岡 佳純

これからお話するのは、まだ、奄美群島の島々がなかつたころの遠い遠い昔のお話です。

「ああ、こまった、こまった。どうしたものか。」

「どうなされたのですか、テイダ大王神様。」

その声をかけたのは、テイダという国の大王神に仕える女神のアミキヨでした。

「それがな、大和の神が、このテイダ国と交流したいと言ってきた。しかし、うわきでは、大和の神は、周りの国々を戦いによって支配してきたという話も聞く。どうしたものか。」

「大王神様、心配することはありません。わたくしもお力ぞえをいたします。」

「そうだな。少し考えすぎたかもしれない。ただ、大和の神をこちらにおむかえするにあたって、一つ困ったことがある。」

「どのようなことでしょうか。」

「大和とこのテイダ国の間には、広いテイダの海がある。大和の神が、こちらに渡ってくるために、足場となる陸地が必要なのだが、どうしたものか……。」

「さようでございますか。では、この国一番の力持ちシレニクという力の神とこのわたくしで、足場となる陸地をこのテイダの海の上につくつてご覧にいらしましょう。」

「そうか、では、たのんだぞ。アミキヨ。」

こうして、女神アミキヨは、力の神シレニクとともに大和とテイダ国を結ぶための足場として島づくりを始めました。力の神シレニクが、海底から砂を運んで山をつくり、女神のアミキヨがそこに森をつくりました。二人は一生懸命働きました。そして二人は、いつしか恋に落ち、互いを愛するようになりました。そして一年後、とうとう大和の国とテイダの国の間に、八つの大きな島々ができました。

それを見た、テイダ大王神は言いました。

「よくやってくれた。これで大和の神を迎えることができる。早速、大和から使いの神々がこちらに向かっているそうだ。」

さて、大和の国からは、火の神、水の神、土の神、木の神などを始めとして、多くの神々がテイダ国にやってきていました。ところが、彼らは、森を荒らし、そこに住む生き物たちに乱暴するなどしていました。

「大和の神々どの、どうしてこのようなことをするのか。」

力の神シレニクが言いました。

「我らは、大和の神の命令によって、このテイダの海と国を支配するためにやってきたのだ。我らに逆らうものは、許さんぞ。」

「なんということだ。これは、テイダ大王神に知らせなくては。」

シレニクはなんとかテイダ大王神のところへ着きました。大和の神々によって大きな傷を受けてロボロになっていました。そして、大和の神の本当の目的を伝えると、その場に倒れてしまいました。

「シレニクをこんなに……。許せない。」

女神アマミキヨは、愛するシレニクを傷つけられた悲しみを胸に、マジムンと呼ばれる毒へびを島々に放ちました。マジムンは、大和の神々におそいかかりました。

「うわあ、痛い、痛い。なんだ、このへびは。神の力がどんどん失われていく。ああっ。」

マジムンにかみつかれた火の神は、力を失い、ヒザマというニワトリに姿を変えられてしまいました。同じように毒蛇にかまれた水の神は、ザンと呼ばれる人魚に姿を変えられてしまいました。人魚にされた水の神は、あわてて海に飛びこんで逃げてしまいました。また、土の神は、ブタの妖怪に姿を変えら

れてしまい、木の神もケンムンというカツパのような妖怪にされてしまいました。さらに、マジムンにかみつかれた他の乱暴な神々たちもトカゲやカエルなどの生き物に姿を変えられてしまい、森のどこかへと消えていきました。

この様子にあわてた大和の神は、テイダの国を支配することをあきらめました。

「わたしが悪かった。もうテイダの国には、乱暴はしないから許してください。」

テイダ大王神は言いました。

「分かりました、大和の神。では、これからは、一緒に豊かな国を築きましょう。」

その後、大和の国とテイダの国は、互いに仲良く助け合いながらはんな栄を築きました。また、妖怪や動物たちに姿を変えられた大和の使いの神々たちも心を入れかえて、テイダの島々を守るようになりました。

さて、アマミキヨたちはどうなったのでしょうか。アマミキヨは、傷が治ったシレニクと結婚しました。そして、三人の男の子と二人の女の子を産みました。大きくなった子どもたちは、二人がつくった島々に移り住み、その島々は、自然豊かなところとして栄えました。これが後にネリヤカナヤ（海の彼方の楽

園)の始まりになったということです。このお話は
これにておしまい。ドンチンシヤン。

